

# 新社会人に贈る言葉

2022.04.01

株式会社フロウエル  
代表取締役 匂坂智之

ビール会社のCMで「大人エレベーター」というのを見たことがあると思います。妻夫木聡さんの「大人になるとは」との問いにリリーフランキーさんがこう答えています。「辛いことが積み重なること」 これを聞いて「ああ本当にそうだな」と思いました。

新社会人の皆さんでも既にそこそこ大人で、そこそこ辛い経験も積まれていると思います。しかし30代、40代と本格的に大人になるという事は、単純に1.5倍や2倍の積み重なりではなく、辛いことが加速度的に増えて積みあがっていくんです。本当ですよ。社会に出て働いてお金を稼ぐということは、親の庇護の下でぬくぬくとやっていた学生時代とは違い、自分で生計を立てて、自分で人生に責任を取っていかねばなりません。人によってはこれまで世話になった親に仕送りすることになる人もいます。

社会に出て自活するということだけでも辛さ倍増ですが、お金が絡み始めると人間関係は複雑になるものです。自分の利害のために平気で人を欺く輩が必ず出てきます。ある一定割合そういう人種が周りにいると思って、他人の言う話を全部信じて、いいように利用されてしまうことを避けるようにしましょう。信じていた人が実はずっと自分を裏切っていたなんてことは、会社生活では珍しい話ではないのです。そういった利害が絡む組織の中で自我を保って強く生きていくことは、とても辛いことです。リリーさんが言う辛いことの積み重なりというのは人生そのもので、積み重なるからこそほぼ強制的に大人にさせられるわけです。人生の勝ち組というのは、お金を沢山貯めた人のことでもなければ、魅力的な女性や稼ぎの良い男性と結婚できた人のことでもないです。「一生忘れられないような辛い出来事」を何度も経験させられて、それでもヤケにならず、やってられねえとそう思っても、今度こそ放り投げ出したいとクサリかけても、精神的な健康を保って前を向いて進みつづける人が勝ち組なんです。

誤解の無いように付け加えると、心が折れてはいけない、常に強く生きろと言っているのではないですよ。強い人間というのは、心が折れない人の事じゃないです。折れないならその方がいいかもしれないけど、どんなに辛いことがあっても心が折れない人なんて、私に言わせればただ鈍感なだけで、鈍感な人間はセンサーが鈍いから仕事の面では使えない人が多いです。本当に強い人とは、折れてもまた心をつなぎ直して立ち上がる人です。折れてい

る時間になるべく短い方がより強い人です。

さて、大人になるという事に話を戻して、実際にあった話を3つ紹介したいと思います。それぞれ違う飲食店の中での出来事で、時系列的には、EP1が一番新しく、EP3が最も古い話です。3つの話を読んであなたはなにを感じるでしょうか。

## Episode1

フロウエルには、今はもう組織図に乗っていない経営企画室という隠れた部署があります。これは取締役3人で構成する最高意思決定機関ですが、フロウエルの取締役はそれぞれ専門業務を持っていて、事実上の執行役員という立場です。私は人事担当でヒト、勝手副社長はマーケティング担当でモノ、岡嶋常務は、財務担当でカネを司っています。その経営企画室の3人がそれぞれの誕生日にリクエストに応じて他の2人が奢るということを毎年やっていて、ある年の私の誕生日に一軒家フレンチを選びました。食べログポイント4点台で予算一人数万円の高級なお店です。タイトな空間の中にその日は我々も含めて4組だけ来店していました。テーブルは横一列の配置です。コース中盤の頃、一番窓際に座っていたカップルがケンカを始めてしまいました。高級店で痴話喧嘩とは性質が悪いなと思いましたが、舌打ちしたり、文句を言ったりは努めてしないようにしていました。女性の方の怒りが暫く収まらないので部屋の空気はどんどん重くなっていきました。その時です。カップルと我々の間に座っていた老夫婦の男性客がわぁっと賑やかして、カップルの両方へ話しかけ何か面白い話をするとあっという間に場が和んでしまいました。スゲー！カッター！と感心して、帰り道でああ成りたいものだねと話しながら駅まで歩いたのでした。

## Episode2

私が一人ホテルのバーのボックス席で酒を飲んでいたときの話です。20代半ば位の若い女性が一人でカウンターを独占し、ワイングラスを5～6個横に並べて座っていました。何が始まるのかと後のソファ席から見ていると、バーテンダーがグラスの数だけ違うボトルを開けて次々と注いで行きます。グラスの正面にそれぞれのボトルが並びました。全てかなり高い希少なワインらしいのは、女性客とバーテンダーの会話で分かります。すると端から女性が飲み始め、それぞれの印象とウンチクをその部屋にいる全員が聞こえるような声で話し始めました。どこの御令嬢だか知らないがちょっと鼻につくなと思って、私はそのまま一人でウィスキーを飲んでいました。若い女性客のご口上が暫く続くものだから、他の客はどう反応するか興味深く観察していると、私の正面のソファ席に座っていた老夫婦の女性の方がついに、小さい声で「うるっさいわね」とつぶやきました。男性の方はじっと押し黙ったままです。多分この奥さんは専業主婦なんだろうなと直感的に思いました。

因みに高級ワインをテイastingしている若い女性の嫌でも聞こえてくる話声によると、その夜そのホテルで開かれている医師会に出席しているドクターが来るのを、不倫相手のチャージで飲みながら待っているオネエチャンだったようです。飲まなきゃやってられ

ない気持ちは分かる気もしますが、この女性も私の前に座っている老夫婦の奥さんも恐らくは辛い経験の積み重ねが大して無い人達なのだと思います。

最後は社会の荒波に揉まれたからこそできるプロフェッショナルな対応に感心した話。

### Episode3

経営企画室がまだ組織図に乗っていて仲町台事業所が本社だった頃の話です。私が社費留学で留守をしている間に次々と辞めてしまった人材の穴を中途採用で埋めるべく、人事の私は毎日残業が続いていました。一人暮らしの私は、残業後に夕飯を作るのがおっくうな時、仲町台駅近辺で外食して帰ることが度々ありました。お気に入りの一軒が、今は閉店してしまってもうない小さなイタリアンのお店です。街イタリアンなので普段使いできる手頃な価格帯でしたが、オーナーシェフがイタリア中部の都市フィレンツェで修行した本格的な味はコスパ最高レベルでした。私はいつも閉店間際の時間に一人予約なしで入店する「その日の最後の客」でした。その時間帯は、無口なシェフが一人で作ってサーブも自らするのであまり話しかけられることもなく、仕事で疲れている時に周りに気を遣わずに静かに食事を楽しめる居心地のいいお店でした。

そんなある日、いつものように店内唯一の客として黙食していると、ドアの外で元気な話声が聞こえて来て、3人の女性が会話しながら店内に入ってきました。さらば静謐に料理と向き合う時間よ、とは思いましたが決して顔にださないよう、女性客の気分を害さないように努めたつもりでした。シェフは、その女性グループを私から最も離れたテーブルに案内したその後私の隣のテーブルに全く音を立てずに「予約席」というプレートをスッと無言で置いたのです。私よりも少し年上と思われるシェフには、すべてお見通しだったのです。なぜいつも一人で来るのか、なぜいつも同じ時間なのか。何を求めて来ているのか。

顧客のことを深く洞察して相手の気持ちを汲んで対応できるというのは、プロフェッショナルですね。辛い経験が多いほど人に優しくなれるとありますが、相手の気持ち、あるいは周囲の感情を推し量って理解することができれば、短絡的にイライラしたり文句を言ったりするのはワンランク上の対応が可能になるでしょう。新入社員の皆さんがフレッシュな今の気持ちを忘れかけた頃、ちょうど仕事も少しできるようになっています。すると周囲も難しい仕事を大した配慮もなく振ってきて、その都度最高の対応をしないと酷い罵声を浴びせられたりするものです。そんなことがずっと続くともうウンザリだ！辞めてやると思いがちです。でもその辛い経験が自分を早く大人にしてくれます。理不尽な相手に腹が立つのは相手と自分が大体同じレベルだからです。本当のプロフェッショナルってなんだろうといつも自問して、EP1の老人やEP3のシェフのように最高にカッコいい大人を目指して頑張ってください。入社おめでとう。これからの健闘を祈ります。